

先史狩猟採集社会と農耕社会との「資源」をめぐる相互依存関係の歴史過程： フィリピン北部カガヤン川下流域の考古学調査を中心に

小川英文

先史狩猟採集社会と農耕社会との相互関係のとらえ方

フィリピン、ルソン島北東部の熱帯雨林に生活する狩猟採集民アグタの社会が、この地域で農耕が開始されて以降、農耕社会とどのような関係をもちながら今日に至ってきたのか。それら両者の関係の歴史的過程を、自然資源の利用のあり方を手がかりとして、考古学的に探ることが本稿の課題である。

アグタの人びとが生業の基盤としてきた自然環境は、熱帯雨林とその縁辺部を中心とする地帯である。これに対して農耕社会は熱帯雨林の外部に隣接する低地において、約 4000 年前からコメを中心とする食料の生産を開始してきた。さらに農耕社会の人びとはアグタとの交換によって、森の産物へのアクセスを可能としてきたことが、少なくとも数百年前の歴史資料から確認することができる。今日、両社会間にみられる食料・森林産品・労働力などの交換を媒介とした相互関係は、かつて当該地域と中国や東南アジア諸地域との長距離交易をローカルに支えた資源流通のネットワークとして機能していた。さらにそれよりも以前、農耕社会が出現した数千年前から、両社会間にはすでに交換関係が成立していたという仮説も提出されている(Headland and Reid 1989, Headland and Bailey 1991)。

狩猟採集社会が今日までこの地域に存続してきた理由として、外界から隔離されてきたからだとする意見が長い間大勢を占めてきた。いわゆる「隔離モデル」である(Heine-Geldern 1932)。しかし 70 年代以降、人間と自然相互の生態学的関係に着目して、隔離モデルに見直しを図ろうとする考古学的研究がみられるようになった(Hutterer 1976)。これらの研究は、狩猟採集社会と農耕社会との間に今日見られる資源交換の実態を定量的に調査し、エネルギー収支の効率性から、技術的に異なる体系をベースとした二つの社会が、資源の交換を媒介として拡大再生産を推し進めるシステムを成立させていることを強調する(Peterson 1978)。交換によって互いに外部である二つの社会が、資源を相互補完的に利用することを可能とし、ひとつの自律的システムを成立させた。こうしたシステムが先史時代に確立されることによって、再生産と人口増加という、農耕開始以降の人類社会が一般的にたどった、経済的・社会的膨張の方向性を回避し、結果的に狩猟採集社会が今日まで存続したという仮説を提示したものである(Peterson and Peterson 1977)。この仮説はその後、狩猟採集社会と農耕社会をひとつの静的なシステムのなかに閉じこめてしまっており、社会変化の要因をさぐる道が閉ざされているという批判に曝された(小川 1996, 2000)。

しかしながら、アグタ社会が現存することからして、技術的基盤が異なる二つの社会が資源交換をおこなってきたという研究の枠組み自体は有効であろう。この研究の方向性の延長として最近では、農耕社会との炭水化物食料の交換なしに、狩猟採集社会単独では熱帯雨林環境下で生存を維持できないとする仮説が論争の的となっている。この論争は、同時期にアフリカのサン社会が外部から隔離されてきたのか、あるいは古くから交流をもっていたかをめぐって展開されていた、伝統・修正主義論争の東南アジア版という様相を呈するまでになった。このように、熱帯雨林の自然を背景として生活してきた狩猟採集社会と農耕社会の歴史は、理論や仮説をめぐって活発に議論されているが、実際の資料で検証していく地道な作業は考古学者に委ねられている。しかしながら、未だ確定的な証拠は得られてはならず、しかもこのような方向性で策定された考古学調査は、本研究以外にみられないのが現状である。

本稿では、以上の議論を踏まえ、先史狩猟採集社会と農耕社会との相互関係を、まずは生業の糧としての資源として考古学的に検証しながら、そのような交換を支えていた社会的な資源として両者の存在が重要であった点を指摘する。具体的には、まず両者関係の歴史的深度についての理論的枠組みを検討し、つぎに考古学データによって仮説の裏付けを試みる。

相互関係の歴史的深度

東南アジア先史時代における狩猟採集社会と農耕社会との同時存在について、ハイネ・ゲルデルンは

「隔離モデル」で説明を試みた(Heine-Geldern 1932)。文化的停滞性が横たわっていると西欧人に解釈されていたこの地の歴史に対してハイネ・ゲルデルンは、東南アジアの狩猟採集社会は長期にわたる外部からの隔離状態が続いた結果、農耕社会に同化・吸収されることなく存続してきたと説明した。

70年代になると、文化生態学的アプローチによって、新たに交換適応モデル(exchange adaptation model)が提示されるようになる(Peterson and Peterson 1977)。ピーターソンらはフィリピン、ルソン島北東海岸パラナン(Palanan)の狩猟採集民アグタ(Agta)と低地農耕社会との間にみられる食料、土地、労働力などの交換を軸とした両者間の社会的関係について民族調査を行い(Peterson 1978)、そのデータをもとにして先史時代から現在までの両者間の交換が狩猟採集社会の存続を助長したと説明している。ピーターソンが目にしたのは、アグタ社会と農耕社会の食料交換によるエネルギーの相互補完性である。パラナン・アグタのほとんどが炭水化物の70~100%を農耕民に、そして農耕民の3分の2がタンパク質の30~50%をアグタに依存している。また土地と労働力も交換の対象となっており、アグタの焼畑を農耕民が利用する場合や、植え付けと収穫作業にアグタが労働力を提供する場合、農耕民は農作物や現金をアグタに支払っている。こうした両者間の交換の実態を過去にも遡らせて、ピーターソンらは技術的背景が異なる集団が、それぞれの技術を用いて資源を利用し、互いに競合せずに不足する面を補い合い、結果的に2つの集団がともに適応を果たして今日に至ったという、交換適応モデルを提示したのである。このモデルがハイネ・ゲルデルンの隔離モデルと大きく異なるのは、過去から現在に到るまで狩猟採集社会は農耕社会と交流をもっていたとする点である。そして狩猟採集社会は農耕社会に包括されることなく、労働投下量を低く抑えることによって、技術革新をことさら推し進める必要もなく、集約化や膨張の方向をたどることから免れることによって、狩猟採集社会が今日まで存続が可能となったと説明したものである。交換適応モデルへの批判は、先史時代から現在までの長い時間にわたって、技術を低いレベルにとどめておけるほど、社会が安定した状態を維持することが可能かという疑問である。ピーターソンらはアグタ社会と農耕社会の2者間のみ閉鎖系をモデル化しただけであって、外界との関係の連鎖を想定してはいない。交換を軸として正のフィードバック(集約化)を抑えた交換適応モデルは、あまりに安定的・静的で、外部からの変化の誘因を想定していない点では、かたちを変えた隔離モデルということもできる(小川 2000)。

80年代後半には、先史時代における狩猟採集社会の自立性をめぐって、熱帯雨林におけるカラハリ論争ともいべき議論が行われるようになった。フィリピン、ルソン島北東部のカシグランで人類学の調査を続けてきたヘッドランドは、熱帯雨林での狩猟採集社会の自立性に対して疑問を唱え、言語学、考古学、そして炭水化物食料の欠乏という観点から検討した。結論として、熱帯雨林では現在と同様に先史時代においても、自立的に生業を営むことは不可能であり、アグタなどの狩猟採集社会は少なくともいまから3000年前には、現在知られているような農耕社会との相互依存関係を確立していたという仮説を提示した(Headland and Reid 1989)。

ヘッドランドは言語学者のリードとともに狩猟採集社会と農耕社会の相互関係の歴史がどれくらい古さをもっているか検討している。アグタなどの狩猟採集民は、現在すべてオーストロネシア語を話している。低地農耕民もオーストロネシア語を話すが、両者の言語は互いに通じ合わない。これはかつてアグタが農耕民であるオーストロネシア語族との接触や交流において、自らの言語を捨て、オーストロネシア語を受け入れたが、その後分化して個別に変化したことを示唆している。両者の密接な関係が途絶え、アグタの言語は別個に変化のプロセスをたどり、現在のかたちとなったが、このプロセスには言語学的に1000年以上の時間が必要であると考えられている(Headland and Reid 1989: 46)。

つぎに熱帯雨林ではタンパク質よりも炭水化物食料の獲得が困難であることを根拠として、農耕社会との社会的・経済的関係なしに、先史狩猟採集社会が熱帯雨林へ進出することは不可能であったという仮説を提唱している。熱帯雨林は豊富な日射量と高温・多雨という気候条件によって、膨大な生物量や生産量と種の多様性を誇っている。しかし栄養の分解・摂取・循環のサイクルが非常に速く効率的に行われるシステムであるため、人間が食用に利用できる果実・葉・花などの再生産器官の生産に、栄養が十分に分配されていない。しかも再生産器官は高い樹冠の上に位置し、そのうえアルカロイド、タンニンと

いった毒やトゲで防御されている。そして植物の栄養分の多くは木質部に蓄えられ、地下の根部にもわずしか蓄えられていない(Hutterer 1982: 121-2)。さらに、種の多様性は食物利用の可能性を広げているようにみえるが、一定の範囲内で同一種が分散して互いに距離をおいているため、利用の際にはかなりの距離を移動しなくてはならない。熱帯雨林における炭水化物を人間が利用するには大きな困難を伴うことから(Hutterer 1982: 135)、先史狩猟採集社会の熱帯雨林への進出が、農耕社会から炭水化物食料を得ることによって成立したとする仮説の提唱にヘッドランドらを導いた。

北部ルソンの考古資料によってこの仮説の歴史的深度を確認すると、農耕社会の存在を暗示する土器の出現が約 4000 年前(小川 2005a)、コメの存在を示す最古の年代が 3400 年前(Snow et al. 1986)である。歴史言語学と考古学の資料もとに、ヘッドランドらはアグタと低地農耕社会との相互関係が 1000 年以前、少なくとも 3000 年前には始まっていたものと考えている(Headland and Reid 1989: 46)。

その後ヘッドランドは同様の仮説を提唱しているベイレーとともに、世界中の熱帯雨林に生活する狩猟採集社会の研究者に、先史狩猟採集社会の自立性の是非を問うシンポジウムを開催している(Headland and Bailey 1991)。しかしこのシンポジウムでは、熱帯雨林では現在でも周囲の農耕社会から自立した狩猟採集社会は存在するという意見が多く、2人の仮説に対する反応は否定的であった。ヘッドランドらと反対者との議論は同じ頃、カラハリ砂漠狩猟採集社会の研究者の間で白熱していた「伝統主義 vs 修正主義」論争と争点を共有している(池谷 2002)。反対者たちはそれぞれのフィールドで炭水化物の生産量と獲得・摂取の実態や、考古学、エスノヒストリーの資料を再検討した結果、1)熱帯雨林での生態学的調査例や交換の民族例が少なく、仮説再検討の余地がある、2)現在も過去においても、熱帯雨林の狩猟採集民は農耕民との関係なしに自活している、という否定的見解を提示した。両者の意見が対立は深刻化したが、あらためて考古資料による仮説の検証、議論の深化の必要性が再確認された。

社会内因論

ラロ貝塚群において 4000 年間に起こったと想定できるような、狩猟採集社会と農耕社会との相互依存関係について考古学的なモデルが必要である。しかし2つの技術的基盤が異なる社会が、互いに関係を保持しながら共に歩む歴史のプロセスをモデル化した事例はない。むしろひとつの社会が単線的な歴史プロセスにおいて、どのように発展してきたかについての考古学的モデルからヒントを得ながら、想定しておかなくてはならないファクターを限定しておきたい。そこで以下では農耕起源の議論を振りかえり、考古学における社会構造論的アプローチのあり方について議論していく。

考古学では農耕の起源について 60 年代以降、特に多くの論争が重ねられてきた。農耕の開始は人類史上の重大事であるため、国家の成立に並ぶほど百家争鳴の議論が繰り広げられてきた。しかしそれらの議論のあり方には2つの方向性が見られる。ひとつは人口増加や環境悪化などの抑圧(ストレス)に要因を求めるもの、もうひとつは社会の内部自体に変化の契機を求めようとするものである。前者はチャイルド(Gordon Child)以来の農耕起源論の流れに沿って、60 年代にビンフォード(Binford 1968)が先鞭をつけ、コーエンの人口圧(Cohen 1977, 1982)やハリス(David Harris)による農耕以前の定住化(Harris 1977)などの議論によってモデル化が進められてきたものである。ここでは予測不可能な自然環境の変動や、定住化に伴う人口増加といった諸要素が中心的に議論され、農耕へのプロセスについてのさまざまなモデルが検討されてきた。当初ビンフォードやコーエンの議論では、人口と資源とのアンバランスな関係は人口圧によって引き起こされ、農耕化への要因と考えられてきた。しかし人口増加自体は人間集団が定住することによって起こると考えられるようになり、70 年代の終わりまでには、農耕以前の定住化が議論の中心となっていく。その後この議論は、世界各地で特殊な条件を考慮しながら、定住化に伴う出生率の増加や動・植物の馴化と栽培化、そして気候条件など、農耕化への諸要素を総合的に組み込むかたちで、今日に至るまで検討され続けている(Cohen 1989; Cohen and Armelagos 1984; Harris 1990, 1996; Thorpe 1996)。

定住化による人口圧を引き金として食料生産が開始されるプロセスをモデル化した農耕化の議論は、技術と生態学という外因的諸要素を生物学的な適応の概念にしたがって検討し、要素間の正のフィード

バックが農耕化への道筋を助長していく過程を描き出している。しかし、農耕化・集約化を技術や環境、あるいは人間集団外の要因に求めようとするこれらの議論に対して疑問を訴える反論が、70年代末から提出され始めた。技術・環境論(外因論)への反論は、社会の内部自体に農耕化への要因を求めようすることによって形成されている。農耕開始の問題に対して新たなアプローチが求められるようになったのは、人口圧への疑問が大きな要因となっている。外因論の論拠のベースとなっている人口圧について民族例を調べてみると、狩猟採集社会では遊動生活に支障のないように、授乳期間中の避妊などの人口調節が行われるため、人口が自然に増加する契機が見当たらない。また考古学のデータからも人口増加がみられたという積極的な証拠を見つけ出すことはできなかった。このため外因論に代わるアプローチが必要となってきた。ベンダー(Bender 1978)は人類が食料生産化に踏み出した理由を、生産関係や社会構造から解き明かすことに求めた。技術や環境といった諸要因の影響関係を検討する外因論は、人間が自然に働きかけ、それによって不足を補い、生き延びるといった適応の概念を論拠としている。しかし定住や人口圧が考古学的証拠として確認されていない以上、別のアプローチを模索する必要がある。そこでベンダーは、外因論で議論されてきた資源とエネルギーの交換ではなく、互酬制にもとづく食料や情報の交換へと研究の方向性を向けることの重要性を説いている(Bender 1978: 207)。

ベンダーの主張する社会的内因論をひと言で要約すると、互酬的交換によって得られた資源や食料は返礼としての義務を生じさせ、儀礼的交換を取り仕切る指導者的立場の人間は、交換の返礼品を用意するために生産を増進させようとし、それが結果的に交換品の貯蔵と定住化を誘発して農耕を開始することになったというものである。ゴドリエが言うように、社会的競争が余剰生産へと駆り立てたというわけである(Godliet 1970: 120)。集団の成員を生産増進へと導くリーダーは、儀礼や盟約などについての知識や情報の専有を基盤として交換品を集荷し、集団内で気前よく分配することによって名声や権威を高めて行く。儀礼や交換を行う際に個人が専有する社会的な情報や知識は、交換品の再分配によって集団の成員の要求を満たし、個人の権威を高めることになる。個人の権威や名声の維持は他集団との関係において、儀礼的交換によって得た贈物に対しては、より価値の高い返礼が義務付けられ、それができなければ威信や名声を落とすこととなる。こうした社会関係の再生産が可能なる前提として、農耕開始期の狩猟採集社会がすでに儀礼的ネットワークを発展させ、知識や情報などの社会的再生産の手段を握る指導者が、農耕開始以前、すでに出現していたことを想定している。

農耕化という生産の集約化が、定住化と人口圧への適応であるならば、適応の社会的側面として儀礼における互酬的交換にも目を向けなくてはならないだろう。メイヤスーが指摘するように、生産物は技術的にというよりも、むしろ社会的に生み出されるものである(Meillassoux 1972)。農耕という生産の集約化は、それまでは人口圧などの社会外的な要因によってしか説明されてこなかった。しかしベンダーが提唱するのは、外因以外の社会的生産関係に着目して別の説明を試みようとするものである。先史時代においても狩猟採集社会は自立的な組織とは考えられず、親族や友好関係をもつ他集団と経済的・政治的ネットワークをベースとした、資源の互酬的交換が行われていたものと推測される。先史狩猟採集社会が寄りどころとしていた資源は野生のもので、その分布は偏っており、季節や年による生産量の変動の幅も大きい。資源の偏在性と変動性に対応するため、狩猟採集社会は集団構成に柔軟性をもたせて、構成員の配置は遊動的で分散的である。これによって集団の人口は資源量に応じて柔軟に調整することが可能であった。同時に不足する資源に対しては、他集団との互酬的關係に基づく交換によって補うことができる。しかし交換によって得た物資には返礼が義務として付帯する。その義務を果たさなければ、儀礼による社会関係の再生産に携わる個人の権威や名声は、集団の内外で失墜することとなる。そのような事態を回避するために、彼は威信財として儀礼的ネットワークのなかで交換される貴重で奢侈な物品を生み出すことに努めなくてはならない。そして狩猟採集社会から、このような突出した個人が出現するためには、彼の年齢や弁舌の能力、すぐれた武勇、そして資源分布や儀礼、友好関係についての豊富な知識などへの敬意や評価がはじめに存在していたと考えられる。そうした人物が儀礼的交換に携わり、返礼用製品の生産を強化するために、再生産の手段である労働力と生産物への管理・統制を行うようになり、徐々に権力を握るようになったと想定される。いったん指導者が再生産の手段をコントロー

ルできるようになると、より多くの交換品の集荷とその貯蔵が必要となる。また儀礼的交換で相手よりも高い名声を得るためには、より希少価値の高い生産物を生み出す肥沃な土地での採集・収穫が頻繁となる。その結果として定住化が助長され、農耕化への道筋をたどることとなる。

本来、平等主義の原則を貫くはずの狩猟採集社会のなかから、突出した個人が出現する契機と食料生産への道筋が同時に語られるベンダーの議論に対しては、その当時盛んだった部族社会から首長制社会へのモデル化の議論を、農耕出現期の狩猟採集社会に遡らせたような違和感があった。しかし平等社会のなかから権威、情報・知識の専有をベースとして権力を掌握した指導者が出現するプロセスを説明しなければ社会発展の解明にはならない。その意味でベンダーは階層化社会へのプロセスを積極的にモデル化したと評価したい。90年代以降、ベンダーの議論を踏まえた平等社会から階層化社会への発展の議論は、その中間的段階としてトランスエガリタリアン(transegalitarian)社会を仮定したモデル化が、ハイデンらを中心に進んでいる(Hayden 1990, 1996, 2001; Junker 2000; Wiessner et al. 1998)。

先史狩猟採集社会研究にベンダーが提唱し、ハイデンらが発展させた、技術・環境論とは異なる研究の方向性は以下のようにまとめることができる。1)儀礼をとおしたモノと情報の交換が社会内部に変化を引き起こす要因となること、2)平等主義の社会規範を崩し階層化を導引するのは生産の余剰ではなく、モノと情報の流通を左右する再生産手段のコントロールにあること、3)生業形態を基準として狩猟採集社会と農耕社会とを異質な社会と見てきたが、平等主義的な部族社会とバンド社会の間には、社会構造上の共通点を見出すことができるという点である。

狩猟採集社会と農耕社会の接触

先史時代における狩猟採集社会と農耕社会という、生業と社会組織の形態が異なる二つの社会が近接して生活する場合、これらの社会の接点では互いの社会が必要とする食料や資材が交錯する。それはまず両者が平地と山地という特定の環境に居住しており、それぞれのテリトリー内において特定の資源が偏在することに起因している。資源利用のあり方を左右するテリトリーの境界線が、両社会間である程度まで固定化され、資源利用の役割分担が明確化するには、友好的な交流から戦争にいたるまで、平和と対立の出会いが繰り返されてきたにちがいない。そしてそのような出会いが度重なった結果として、それぞれの社会の内部で、それまで利用してきた物質的資源の生産と、保持されてきた社会関係の再生産のあり方に大きな変化がおとずれたであろうことは容易に想像できる。しかしそのような人間行動の軌跡は遺物として残されていないため、見えない部分を想像によって埋める作業が必要である。その際、社会を変化へ導いたと考えられるさまざまな社会的ファクターを検討して、起こりえたであろう最も妥当なモデルを作り出す作業が必要である。そのための手がかりとしてまず、狩猟採集社会と農耕社会との相互関係がはじまる時点における考古学モデルを検討する。

緩やかな接触

先史狩猟採集社会が、居住地選択、資源分布の中心、利用可能な資源分布域などについての情報の収集と交換、処理、分配・共有をどのように行っていたかについては、これまで十分に議論されてきたとはいえない。こうした研究状況は狩猟採集社会と農耕社会との集団関係においても同様である。先進集団は農耕の技術力と生産力によって徐々に人口を増加させ、それによって支え切れなくなった余剰人口が母集団から分離して新たな集団を形成し、周辺へと拡散して行く。拡散によって農耕社会は、それまで狩猟採集社会が資源を利用してきた領域を占拠し、狩猟採集社会を農耕社会へと包摂しながら農耕を伝播させて行ったと考えるのが一般的であった。

先史狩猟採集社会が一方的に農耕社会へと飲み込まれていったかのようなイメージを抱かせる農耕伝播論に対してデネルは疑問を唱え、両者のさまざまな接触の可能性を、考古学データと照合しながら検討している(Dennel 1985)。デネルは考古資料の分析から両者の接触形態を **図 1** のように想定している。両者の交流のあり方が積極的なものである場合は、狩猟採集社会が農耕技術を積極的に習得して農耕社会へと同化するか、あるいは農耕社会が一方的に狩猟採集民を排除し、テリトリーを占拠するような事態が想定できる。いっぽう両者が互いに関心をもちない消極的な交流の場合には、まったく接触をもたないか、あるいは消極的であるが、物資の交換をおこなうような相互関係を想定した。

デネルは考古資料の検討によって、狩猟採集社会と農耕社会のフロンティアで最も可能性が高い接触形態は、両者間に物資が往来する交流のタイプだが、積極的に農耕社会を受けいれたり、あるいは農耕社会に併呑されるようなものではなく、消極的な交流だったと予測している(Dennel 1985: 136)。狩猟採集民のテリトリーに移住してきた農耕社会は、すぐに狩猟採集民の注目の的となり、農耕社会への最初の接触は、狩猟採集民の側から行われた可能性が高い。定住生活を続ける農耕民よりも行動範囲の広い狩猟採集民のほうが、農耕民の生活様態をより注意深く観察できただろう。農耕民がもつ土器、磨製石器、農作物や家畜にも大きな関心を寄せていたと考えられる。同時に農耕社会は、生産の集約化のため必然的に労働力を必要とする。それゆえ消極的ではあるが、両者の交流はまず物資と労働力の交換をとおして開始される。このような緩やかな交流を通じて、狩猟採集民は必要に応じて農耕技術を習得したであろう。

資源確保のための情報交換

ここでは資源利用のための情報確保の観点から議論を進めてみたい。狩猟採集社会の資源利用のあり方に直接影響していると考えられるのは遊動性と居住地の選択である。農耕社会との接触を契機として、先史狩猟採集社会の遊動性と居住、資源利用のあり方に大きな変化が起こったと推測できる。ある集団は周囲の資源分布についての情報とそれらを採用するための移動計画に必要な情報を常に収集している。狩猟採集社会間に限定しても、他集団との移動や居住についての情報交換が不十分だと、居住地と利用可能な資源領域が他集団と重複することとなり、移動を余儀なくされるため、その分のコストがかさむことになる。そこへさらに農耕社会が登場し、情報が不足するとその分、大きなコストがかかる。

狩猟採集社会の居住と遊動のパターンは生態的・社会的環境についての知識をベースとしているが、それが農耕社会の出現によって大きく攪乱されることとなる。このことは生業活動と資源分布に関する情報を有機的に統合する社会関係を直接脅かすことを示している。農耕集団がさらに増えつづければ、狩猟採集社会が直面する状況はより複雑となる。こうした複雑な状況下において、資源確保により有利な、よりコストの低い居住地の選択と移動パターンを決定するためには、他集団の生業活動パターンについての情報収集が死活問題となる。農耕社会が登場する以前であれば、他の集団についての情報は、狩猟採集社会間で結ばれていた親族関係や友好関係をもとにした社会的ネットワークを通じて入手してきた。しかし農耕社会出現以降は、彼らとのあいだにも円滑な社会関係を結び、生業活動のコストを下げるための情報を確保することが重大事項となっていたと予測できる。

このような情報とコストの問題についてモアは、先史狩猟採集社会と農耕社会が出会うフロンティアにおいて、互いに移動情報が交換されない場合のコストについてシミュレーションを行っている(Moore 1985)。まずコンピュータ上に資源分布が均一な架空の資源領域を作る。集団間には情報交換がないものと仮定し、各集団がランダムに占拠するものとする。他集団と占拠が重複する場合は他の場所に移動しなければならない。そしてこの移動はコストとして換算される。また狩猟採集社会は季節的に移動するが、農耕社会は定住しているので移動のコストはかからないものとする。

まず最初に狩猟採集社会のみがこの資源空間に存在する場合を想定してシミュレーションを行った。その結果、資源空間全体の半分も占拠していない場合でも、占拠重複で移動しなくてはならない事例が急増した。これは人口密度が低く抑えられていて、同じ資源領域を共に利用する集団が比較的少ない場合でも、情報交換がない場合には移動のコストは大きくなることを示している。

つぎにこの領域に農耕社会を登場させてみる。農耕社会は定住しているために居住地の移動がない。その分、狩猟採集社会の占拠重複も低く抑えられると期待できる。しかしシミュレーションの結果は占拠重複と移動コストが増加することには変わりがないというものであった。これは農耕社会が出現しても資源と居住の情報が十分でなければ、狩猟採集社会には移動コストが増加することを示している。

社会的資源としての農耕社会

このシミュレーションでモアが指摘する重要な点は、農耕社会の出現による先史狩猟採集社会への影響が、単に居住・資源空間だけではなく、狩猟採集社会間に存在した、生業と社会的紐帯についての情報の質や量、そしてネットワークのかたちにもまで及んでいたという点である(Moore 1985: 105)。その影響はなによりも狩猟採集社会の移動コストを抑えるための社会組織上の変化として現れる。狩猟採集

社会には、移動性を減少させるような情報処理能力の高い社会組織とネットワークの改編が求められることになる。現実にはこのような社会組織の改編は、季節的な構成員の離合・集散によって資源と居住についての情報が集められ、その情報の分析をもとにしてコストの低い移動が繰り返し検討され、実践されることによって可能となる。そして情報処理能力を高め、的確な移動計画を決定することが移動コストを下げることに繋がっていく。さらに農耕社会との関係において狩猟採集社会が移動コストを下げられるとすれば、それは社会的資源として農耕社会をどれだけ利用できるかにかかっているだろう。

この実践の一例が両者間での肉などのタンパク質食料や労働力とコメ、イモなどの植物性食料との交換である。熱帯雨林における炭水化物生産量の低さを考えると、この交換は確かに移動コストの減少へとつながる。しかしこの交換は狩猟採集社会の平等原理にもとづく交換ではないため、社会的紐帯の再生産のあり方に大きな変化をもたらしたであろうと想像できる。また炭水化物の交換によって、植物採集という性的分業からある程度解放された女性の役割が大きく変化したであろうことも見逃すことはできない。さらに大きな関心事は、両者の関係が不平等なものへと変化していくプロセスについてである。狩猟採集社会が交換財としての肉を確保するために、あえて熱帯雨林へ進出するには、農耕社会によってパトロン-クライアント関係に陥れられたことも想定しておく必要がある。狩猟採集社会にとって農耕社会が社会的資源として重要であるとすれば、両者の関係が政治経済的に不均衡な状態に移行した原因についても、交換関係の深化が関わっていたものと考えられる。

社会的・政治的關係が保障する生業活動

ヘッドランドが指摘するように、先史狩猟採集社会による熱帯雨林への進出が農耕社会からの炭水化物食料の供給を得てはじめて可能であったとすれば、農耕社会は狩猟採集社会からの森林資源の見返りを期待して、さまざまなサービスを提供したであろう。農耕社会にとっては肉の確保のほかにも、労働力の確保や農地の拡大は死活の問題である。こうした農耕社会の需要に狩猟採集民を動員しつづけるための見返りの提供は炭水化物食料のみではなかったはずである。

さらに農耕社会が提供するサービスのなかで両者の政治経済関係の変化に影響を与えるのは、狩猟採集社会間の紛争調停である。農耕社会との交換によって炭水化物食料の供給が可能となった狩猟採集社会は、熱帯雨林を生業活動の中心的な場とするようになったが、そこで新たな資源獲得競争がはじまり、狩猟採集社会間での紛争が起こる。紛争はこれまでどおり狩猟採集社会間の儀礼的ネットワークのなかで調停・解消される場合もあったであろうが、森林資源獲得の利害が絡む農耕社会が調停に乗り出したと考えるほうが妥当であろう。狩猟採集社会間の紛争は同時に農耕社会間にとっても生業上の大きな問題であるため、この調停には農耕社会間での利害の調整も必要であったと考えられる。

狩猟採集社会の熱帯雨林での紛争解決と円滑な活動の保証は、狩猟採集社会の移動コストばかりでなく、農耕社会の生業活動のコスト削減にもつながっている。そして農耕社会の紛争処理能力に対する狩猟採集社会の依存度が増すにつれて、狩猟採集社会の農耕社会に対する負債も増加し、徐々に両者間にパトロン-クライアント関係が構築されていったと推測できる。こうして狩猟採集社会の生業コスト削減は、結果的に農耕社会への政治的依存状態を生み出すこととなり、その後、両者間の社会的不均衡が常態化していったものと考えられる。

カガヤン川下流域における交流の痕跡

先史時代における狩猟採集社会と農耕社会との相互関係のモデルは、考古学的に検証可能であろうか。両者の交換は遺物の出土状況を複雑なものにする。剥片石器の出土によってその遺跡が即座に狩猟採集民の遺跡とは断定できないからである。遺跡の担い手を判断するには単独の遺跡の発掘資料だけでは十分でない。地理的に限定された領域のなかで、広範に分布する遺跡全体の変遷を時期ごとに明らかにし、各遺跡から出土した各時期に属す遺物の種類と量、そしてその変化を追うことによってはじめて遺跡の担い手を判断する材料が揃ったこととなる。遺物や遺跡全体に人間行動の網の目を仮構し、それらの分布パターンや時代的变化を総体的に捉えようとする方法は、セトゥルメント・アーケオロジーと呼ばれており(小川 1996)、先史時代の狩猟採集社会と農耕社会の関係のモデルも、この方法によって検証の作業を始めることができる。

先史狩猟採集社会と農耕社会の相互関係の歴史プロセス解明のため、筆者はフィリピンの北部ルソン島カガヤン川の下流域 50km に分布するラロ貝塚群を対象とする調査を行ってきた。ラロ貝塚群の分布は、カガヤン川両岸の河岸段丘上を中心に貝塚遺跡が立地し、後背地の石灰岩丘陵地帯には洞穴遺跡が分布するという状況にある(図2)。発掘調査の結果、20ヶ所以上の貝塚遺跡から出土した土器群を4000年前から1000年前までの4つの時期に編年することが可能となった(小川2007)。またこれら4つの土器群の前後に、土器出現以前の剥片石器群を出土する時期と貿易陶磁の時期を加え、ラロ貝塚群全体の遺跡は第1期から第6期までに編年される(図3)。狩猟採集社会と農耕社会との接触にかかわる遺跡は、剥片石器群から土器群への文化層の変化が確認できる遺跡である。こうした移行期の文化層はガエラン(Gaerlan)貝塚で確認されている。

ガエラン貝塚は河口から45km上流、カガヤン川東岸の河岸段丘上に位置し、淡水産二枚貝を主とする貝層から剥片石器や土器片、動物骨などが出土する。ラロ貝塚群を主体的に構成する淡水産二枚貝の生息域もこのあたりまでを上限としている。文化層は3層からなり、剥片石器から土器への遺物の変化がうかがえる；1)シルト層から剥片石器群のみが出土する時期(第1期:4000年前以前)、2)貝層下部:地表面下60cmから40cmまでの貝層から剥片石器が出土、3)貝層上部:20cm厚の貝層から土器片が出土。石器群は不定形剥片石器で構成される。土器は少量のみの出土で赤色スリップが塗布されている。ラロ貝塚群に出現する最初の土器だが、器種構成が明らかではなく、土器群を形成するまでには至っていないので、暫定的に「赤色スリップ土器」と呼ぶ。

こうした遺物の出土状況を解釈すると、剥片石器を使用していた狩猟採集社会がある時点からカガヤン川で産する淡水産二枚貝を食料として採集していた。そこに農耕民が到来したが、その後も貝を引き続き利用していた様相が想像できる。剥片石器群に続く、赤色スリップ土器が出土する時期は約4100年前から3700年前の年代測定値が得られている(小川2007)。

つぎの無文赤色スリップ土器群の時期(約3500年前から3000年前)には、遺跡では貝塚が形成されない。貝塚を形成する淡水産二枚貝が生息するカガヤン川の河床が砂から泥へと変化し、下流域が沼地の環境となったことが可能性として考えられる。しかしこの時期の遺跡はカガヤン川両岸に広く分布するようになる。無文赤色スリップ土器群の遺跡からは多くの土器片のほかに、わずかに数点の剥片石器が得られている。剥片石器はいずれも完成品のみで出土し、無文赤色スリップ土器群を出土する低地遺跡で製作されたものではない。限られた出土数ではあるが、石器のみが剥片石器を製作する集団から持ち込まれた可能性を示唆している。

つぎの有文赤色スリップ土器群の標識遺跡であるマガピット貝塚(Magapit)はカガヤン川河口から40km地点の、河岸直上標高50mの台地上に位置し、他の貝塚遺跡同様にカガヤン川に産する淡水産二枚貝で構成され、大量の有文赤色スリップ土器を出土する。磨製石器(stone adze)やシカ、イノシシなどの動物骨も出土するが、剥片石器は出土していない。この時期は測定年代により約3000年前から2500年前までに相当する。

いっぽう丘陵地帯では洞穴と開地遺跡を調査している。これまでの洞穴遺跡の発掘調査により、カガヤン川河岸から直線で東5kmの標高50mに立地するマバゴッグ洞穴(Mabangog)で、低地貝塚と同じ貝種の淡水産二枚貝で構成される貝層中から剥片石器群と土器群が検出されている(小川1999)。2x2m、30cm深度の調査規模であったが、40点の剥片石器と700点以上の土器片が出土した。土器片は30cmと薄い層厚のため、有文と無文、両時期の赤色スリップ土器群と黒色土器群が混在して出土している。絶対年代では約3500~1000年前にあたる。剥片石器群が狩猟採集民によって製作・使用・廃棄された道具であるとすれば、この洞穴は狩猟採集社会によって営まれた遺跡である可能性を示唆している。そしてここから出土した土器や貝は、低地農耕社会との交換をとおして入手したものと考えられることができる。マバゴッグ洞穴の遺物出土状況は文化層が薄いため、4つの土器群の各時期に対応するかたちで交流の様相を明らかにできないが、長期にわたって低地の農耕社会と丘陵の狩猟採集社会が交流していたことを示している。

マバゴッグ洞穴から東へ5kmの石灰岩丘陵上に点在する開地遺跡においても、量的には少ないが、有

文赤色スリップ土器片が出土している(小川 2007)。丘陵地域の開地遺跡は稜線がやや幅広になった台地上に形成されている。ここでは貝層は形成されていない。しかし不定形剥片石器群が共伴している。土層の厚さが 30cm と薄いため、有文赤色スリップ土器群と剥片石器群との共伴を、同時期とみなすことにはやや躊躇せざるをえない。

有文赤色スリップ土器群期の遺跡分布をみると、カガヤン川河岸段丘上には存在せず、マガピット貝塚が立地する石灰岩台地から東の丘陵地域に広がっている。もちろん丘陵地域の開地遺跡には貝層はなく、マガピット貝塚とは異なった生業基盤のもとで生活していたことが分かる。しかし同時に有文赤色スリップ土器片が丘陵地域の開地遺跡から出土することについては、貝塚を形成した低地の集団と土器の交換を行った可能性も視野に入れて、今後の調査を継続したいと考えている。さらに最近の調査では丘陵開地遺跡から、ラロ貝塚群には見られない土器片の出土も確認されており、カガヤン川下流域とは異なった地域との交換のネットワークを保持していた可能性も想定できる。

ラロ貝塚群出土の土器群はその後、有文と無文の黒色土器群の時期へと代わっていく(2400 年前 ~ 1000 年前)。河岸段丘上の貝塚の規模は巨大化し、長さ 2 km にもおよぶものまで造営される。貝採集量は日々の食料の域をはるかに超え、余剰としての貝の身は乾燥や塩辛への加工を経て、ネットワークを通じて交換・交易されていた可能性も想定できる(小川 2006)。さらに 1000 年前以降の時期になって、陶磁器を中国や東南アジアの他の地域から搬入する代価として、交換財の生産量を増やす必要が生じるようになる。その要請にしたがって、低地農耕社会内にも、丘陵狩猟採集社会にも生産量を増加させるための情報とコストの管理が、生産セクターへ課されるようになったと考えられる。その管理を担ったのはほとんどの場合、低地農耕社会の特定のセクターが担ったであろう。そしてその後の時期になると、フィリピンでも早くにカガヤン川下流域にスペイン人が到来し、低地と丘陵のネットワークはずこしずつ世界システムに組み込まれていくことになる。

ラロ貝塚群と丘陵地域における考古遺物の出土状況や遺跡分布のあり方は、狩猟採集社会と農耕社会との交流についてのモデルを未だ十分に検証できるものではないが、両者の交流の実態を徐々に明らかにしている。ガエラン貝塚の剥片石器群から赤色スリップ土器への変化から予測されるように、農耕社会との接触以降、狩猟採集社会は低地から丘陵へと集落を移動し、熱帯雨林を資源とする生業活動の開始したものと考えられる。丘陵への集落の移動は、狩猟採集民が移動コストを抑えるための手段であり、農耕社会を社会的資源として利用し、両者間の交換を可能とする方策である。そしてその後も両者の関係はマバゴッグ洞穴や開地遺跡群出土の土器群の出土状況にみられるように、長期にわたって継続した様相をうかがうことができる。また貝塚を形成した人びとが摂取した食料の分析結果によると、シカやイノシシなどの陸上動物の摂取量が多かったことが判明している(三原他 2002)。これは貝塚中の埋葬址から出土した人骨に残るコラーゲンを同位体分析することによって明らかとなったが、貝塚を形成した人びとの骨であれば、当然、貝や魚など、水中の動物をより多く食べていたと予測していたが、実際には陸上動物を多く摂取していた。こうした事実もまた、交換を介して農耕社会が狩猟採集社会からタンパク源を入手し、炭水化物などを中心とする代価を交換していたことも想定可能である。

これまで考古学では、先史狩猟採集社会と農耕社会との相互関係が想定されてこなかった。その状況は農耕社会との接触以降の狩猟採集社会の歴史においても同様である。こうした研究状況にあって、本稿では、方法として研究の主流である、農耕社会における階層化の研究を参照しながら、そのすぐ周辺で先史狩猟採集社会が農耕社会と築いてきた社会的関係を予測することからまずアプローチを開始した。その際に着目したのは、考古学が得意としてきた経済的側面をベースとする技術・環境論だけではなく、儀礼的關係にもとづく、資源や情報の交換、そして社会関係の再生産についてであった。そこから抽出された、移動にかかるコストの問題をキー概念として考察を進め、先史狩猟採集社会にとって隣人である農耕社会が新たな情報源である社会的資源として機能し、生業活動における移動コストを下げることに寄与したことを予測することができた。

モデルの検証のための調査はフィリピンのラロ貝塚群で継続中であるが、これまでの成果は、初期接触以降、狩猟採集社会の集落が丘陵地へ移動した可能性を示唆している。そしてその後、狩猟採集社会

は石灰岩台地の熱帯雨林の資源を利用しながら、低地の農耕社会と食料や道具などを交換してきた様相をうかがうことができた。

最初の接触期を経て、その後の狩猟採集社会と農耕社会の関係もまた、資源と生業に関する情報をめぐって社会的に規定される。その後、農耕社会の生産拠点が低地一帯へと拡大し、狩猟採集社会の主要な生業領域が熱帯雨林のなかへと変化していく背景には、政治経済的な不均衡状態が生み出されたことが予測される。その際にも資源と生業活動に関する情報の配分には農耕社会の政治経済的な意図が反映されていたと考えることができるが、それは今後の課題としたい。

引用文献

Bender, B.

1978 Gatherer-hunter to farmer: a social perspective. *World Archaeology* 10-2: 204-222.

Binford, L.

1968 Post-Pleistocene Adaptations. In S. Binford and L. Binford (eds.) *New Perspectives in Archaeology*: 313-342. Chicago: Aldine.

Cohen, M. H.

1977 *The Food Crisis in Prehistory*. New Haven: Yale University Press.

1989 *Health and the Rise of Civilization*. New Haven: Yale University Press.

Cohen, M. H. and G. L. Armelagos (eds.)

1984 *Palaeopathology at the Origin of Agriculture*. New York: Academic Press.

Dennel, R. W.

1985 The Hunter-Gatherer / Agricultural Frontier in Prehistoric Temperate Europe. In S. W. Green and S. M. Perlman (eds.) *The Archaeology of Frontier and Boundaries*: 113-139. New York: Academic Press.

Early, J. D. and T. N. Headland

1998 *Population Dynamics of a Philippine Rain Forest People*. Gainesville: University Press of Florida.

Godlier, M.

1975 Mode of Production, Kinship, and Demographic Structures. In M. Bloch (ed.) *Marxist Analyses and Social Anthropology*: 3-27. London: Malaby Press.

Harris, D.

1977 Setting Down: an evolutionary model for the transformation of mobile bands into sedentary communities. In J. Freeman and M. J. Rowlands (eds.) *The Evolution of Social Systems*: 401-17. London: Duckworth.

1990 *Settling Down and Breaking Ground: The Neolithic Revolution*. Amsterdam: Twaalfde Kroon-Voordracht.

1996 (ed.) *The Origins and Spread of Agriculture and Pastoralism in Eurasia*. Washington, D. C.: Smithsonian Institution Press.

Hayden, B.

1990 Nimrods, piscators, pluckers and planters: the emergence of food production. *Journal of Anthropological Archaeology* 9: 31-69.

1996 Feasting in Prehistoric and Traditional Societies. In P. Weissner and W. Schiefenovel (eds.) *Food and the Status Quest*: 127-147. Oxford: Berghahn Book.

2001 Fabulous feasts: A prolegomenon to the importance of feasting. In M. Dietler and B. Hayden (eds.) *Feasts: Archaeological and Ethnographic Perspectives on Food, Politics, and Power*: 23-64. Washington, DC.: Smithsonian Institution Press.

Headland, T. N. and R. C. Bailey

1991 Introduction: Have Hunter-Gatherers Ever Lived in Tropical Rain Forest Independently of Agriculture? *Human Ecology* 19:2: 115-122.

Headland, T. N. and L. A. Reid

1989 Hunter-gatherers and their neighbor from prehistory to the present. *Current Anthropology* 30: 43-66.

Heine-Geldern

1932 Urheimat und fruheste Wanderungen der Austronesier. *Anthropos* 27: 543-619.

Hutterer, K.

1976 An Evolutionary Approach to the Southeast Asian Cultural Sequence. *Current Anthropology* 17: 221-242.

1982 Interaction between Tropical Ecosystem and Human Foragers: Some General Considerations. Working Paper. Environment and Policy Institute, East-West Center. Honolulu.

池谷和信

2002 『国家のなかでの狩猟採集民 - カラハリ・サンにおける生業活動の歴史民族誌』、国立民族学博物館研究叢書 4

Junker, L. L.

2000 *Raiding, Trading, and Feasting, The political Economy of Philippine Chiefdoms*. Quezon City: Ateneo de Manila University Press.

- Meillassoux, C.
 1972 From Reproduction to Production. *Economy and Society* 1: 93-105.
 1977 『家族制共同体の理論 - 経済人類学の課題』、川田順造・原口武彦訳、筑摩書房
- Moore, J. A.
 1985 Forager / Farmer Interactions: Information, Social Organization, and the Frontier. In S. W. Green and S. M. Perlman (eds.) *The Archaeology of Frontier and Boundaries*: 93-112. New York: Academic Press.
- 三原正三・奥野充・小川英文・田中和彦・中村俊夫・小池裕子
 2002 「フィリピン、ラロ貝塚群出土遺物の AMS14C 年代と出土人骨の食性分析」、『名古屋大学加速器質量分析計業績報告書』 13: 82-104
- 小川英文
 1996 『狩猟採集民ネグリの考古学 - 共生関係が提起する諸問題』、スチュアート ヘンリ編 『採集狩猟民の現在』: 183-222、言叢社
 1999 Excavation of the Mabangog Cave, San Mariano, Lal-lo, Cagayan, Philippines. 『東南アジア考古学 (*Journal of Southeast Asian Archaeology*)』 19: 93-114.
 2000 「狩猟採集民と農耕民の交流 - 相互関係の視角」、小川英文編 『交流の考古学』: 266-295、朝倉書店
 2005 「森と川の民の交流考古学 - 先史狩猟採集社会と農耕社会との相互関係史」、池谷和信編 『熱帯林に暮らす人々』: 35-63、人文書院
 2006 「大貝塚を作った人々：ルソン島ラロ貝塚群」、印東道子編 『環境と資源利用の人類学 - 西太平洋の島々における資源利用』: 173-196、明石書店
 2007 「ラロ貝塚群調査 30 年の研究成果」、青柳洋治先生退職記念論文集編集委員会編 『地域の多様性と考古学』: 267-283、雄山閣
- 小川英文・W. ロンキリオ
 2006 編著 『北部ルソン島ラロ貝塚群の発掘調査—先史狩猟採集社会と農耕社会の相互関係の解明—』、平成 15 年度～平成 17 年度科学研究費補助金(基盤 A(1)海外学術調査)研究成果報告書、145 頁
- Ogawa, H., W. Ronquillo and A. Garong
 2006 Typological and Chronological Studies on the Decorated Black Pottery Assemblage from Lal-lo Shell Middens. 『東南アジア考古学』 26: 1-33.
- Peterson, J. T.
 1978 *The Evolution of Social Boundary*. Champaign: University of Illinois Press.
- Peterson, J. T. and W. Peterson
 1977 Implications of Contemporary and Prehistoric Exchange Systems. In J. Allen, J. Golson and R. Jones (eds.) *Sunda and Sahul*: 567-599. New York: Academic Press.
- Snow, B. E., R. Shutler, D. E. Nelson, J. S. Vogel and J. R. Southon
 1986 Evidence of Early Rice Cultivation in the Philippines. *Philippine Quarterly of Culture and Society* 14: 3-11.
- Thorpe, I. J.
 1996 *The Origins of Agriculture in Europe*. London: Routledge.
- Wiessner, P. and Tumu, Akii
 1998 *Historical Vines: Enga Networks of Exchange, Ritual, and Warfare in Papua New Guinea*. Washington, DC.: Smithsonian Institute Press